

第三の躍進を本格的な流れに

志位和夫著 『戦争か平和か 歴史の岐路と日本共産党』

石川 康 宏

「日本はいま、戦争か平和かをめぐって、戦後最大の歴史的岐路を迎えています」「憲法第九条に真っ向から背いて、日本を『殺し、殺される国』につくりかえていいのか」。この本は、日本共産党の委員長が、日本社会の現状にこのような強い危機意識をもって、切実な政治の争点に正面から切り込んだ論集です。

.....

第I部の「亡国の政治」と訣別し、未来に責任を負う新しい政治を」は、①「海外で戦争する国」づくりを許さない（米軍には年間八〇〇〇人の自殺者が）、②「逆立ち」経済をただそう（首相の執務室に「株価ボード」が置かれた株価連動内閣）、③「原発ゼロの日本」へ（人格権を最優先する画期的な福井地裁判決）、④基地のない平和な沖縄を（銃剣

とブルドーザー」の再現を許さぬ鳥ぐるみの闘い」と、わかりやすいトピックを交えた現状分析の上で、「安倍内閣打倒の国民的大運動」を呼びかけた総論的なものとなっています。

この原稿を書いている時点で、県知事選挙・那覇市長選挙の勝利など、沖縄での闘いにはすでに画期的な前進がつくり出されていますが、それは小選挙区制による見せかけの「多数」に驕った安倍暴走・亡国政治が、どれほど強い国民の抵抗に直面せざるを得ないかを指摘した、この講演の的確さを事実で示すものとなっています。

.....

第II部の「社会変革の事業と日本共産党」は、東日本大震災の被災地での党の献身的な活動を紹介しながら、変革の事

業における日本共産党の役割を、①先見性、②不屈性、③草の根の力という三つにまとめ、党を大きくすることの必要を訴えるものになっています。

「歴史に学び、日本のいまと未来を語る」は六五ページにおよぶ大作で、若い世代に向けて、①日本共産青年同盟の闘いの歴史（機関誌「赤色スポーツ」、「赤色ピク（ニック）」での「プロレタリアサンドウィッチ）、②日本社会が直面する二重の矛盾、③「三つの異常」（「できる」ことより「わかる」教育）、④資本主義の矛盾と未来社会の展望と、日本共産党の綱領路線をわかりやすく、説得力をもって自由に語るものとなっています。「青年動くとき、すでに勝利の光あり」というスローガンの紹介は、今日の若者たちの新しい立ち上がりを前に、か



つて若かった世代をも大きく励ますものとなつていきます。

「第三の躍進」を本格的な流れに」は、二〇一三年七月の選挙での一五年ぶりの躍進を自己分析し、これをさらに「本格的な流れ」とする実践の指針を示したものととして、政治の現瞬間にはとりわけ重要なものとなつていきます。躍進の教訓とされたのは、①新しい綱領の決定を中心とした政治的・理論的な前進、②「一点共闘」の発展と日本共産党への信頼の深まり、③草の根で国民と結びついた大きな党づくりの努力でした。そして今後の努力方向として示されたのは、①抜本的対案をかかげて安倍暴走政権と正面から対決する姿勢、②日本共産党の路線、理念、歴史を丸ごと理解してもらう、③党の自力をしかりつける、の三点でした。インターネット活用のさらなる努力を呼びかけているところも大切です。

……………

第三部の「日本の真の主権回復をめざして」は、サンフランシスコ平和条約が

発効した四月二八日を「主権回復の日」として祝う安倍政権を批判し、それがいかに「従属と屈辱の日」でしかないかを示した力作です。平和条約の根本的な問題を、①講和の対象を一方的に限定した、②領土不拡大の原則にそむいた、③旧安保条約と連動したという三点に整理し、その上で、戦後日本を世界に類のない基地国家とする「全土基地方式」の起源と歴史を、①旧安保の調印にいたるマッカーサー・メモとダレス発言、②旧安保調印時に日本側の要望で隠された「行政協定」、③六〇年の新安保条約という順で明らかにします。さらに政府の式典での天皇の政治利用や、これが改憲の野望につながることに批判、そして、四月二八日が祖父・岸信介の公職追放解除の日でもあることから、これを祝いたくなる安倍首相の心情を推し量るゆとりも示されます。

最後に「歴史の偽造は許さない」と「日本軍『慰安婦』問題アジア連帯会議でのあいさつ」は、「慰安婦」問題についての政府見解の到達点である「河野談

話」への不当な攻撃（政府の内部からも）に反論し（本来政府が行うべきもの）、真実を明らかにしようとしたものです。「河野談話」が認めた、①「慰安所・慰安婦」の広範な存在、②「慰安所」の設営などへの軍の関与、③「慰安婦」募集への軍の関与、④「慰安所」における痛ましい生活、⑤植民地朝鮮に多くの被害者が、などの論点を明らかにし、その上で「見直し派」が論点を連行の強制性に矮小化わいしょうしていること、攻撃が「河野談話」への経過を無視し、さらに日本国内の裁判での事実認定や海外の公文書の存在から目をそらすものであることなどを、厳しく指摘するものとなつていきます。

以上、本書の内容は、いずれをとっても現代における生きた政治活動の指針として、大きな意義をもつています。著者の奮闘に応えようとする、多くの読者の登場を切に願うものです。

（いしかわやすひろ、神戸女学院大学教授）

〔新日本出版社、本体価格一三〇〇円〕